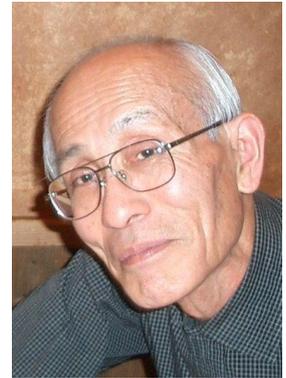


行ってみなきゃわからないドイツ(前編)

2015.8

中間一範



八期の皆さま 日々お変わりなくお過ごしのことと察します。

さて拙者は、今夏7月初めから9月初めまでの予定で、ドイツのフランクフルトで過ごしています。

今回は、ひたすらナンビリと足の向くまま無為を楽しむひとときを多く味わってみたいと、2年半越し(前回は冬季)でドイツを訪れていますが、なぜか飽くことがなく、異文化が今なお新鮮で不思議な感覚です。

ここに改めて拙文「行ってみなきゃわからないドイツ」と題し、戯言を記しました。内容ご存知の諸兄諸姉にはご笑納遊ばれの境地ですが、ここに敢えて、別添にて大石大兄に2回に分けて送ります。 2015-8 中間一範

＝ドイツの夏季＝

日本とドイツを比べると、日本では猛暑ありがドイツでは凌ぎやすい冷夏？

ドイツの気温は、それでも時には 30℃を越す好天が続くこともあり、最近は温暖化の影響なのか場所によっては連日 35 度前後まで上がる日もあり、暑くなっているとのこと。

しかし、湿度が高くないため、風通しの良い木陰では汗ばむことがなく、日によっては真夏でも秋のように涼しい日もあり、特に夜間の外出の際には、急な冷え込みのために長袖類の用意が必要で、寒暖の日差変動が激しいのがドイツの夏で、日中でも街中で見かける夏の服装は、半袖に短パン、長袖に短パン、長袖(中にはジャンパー服)に長ズボンの人達など男女様々<Photo A>である。

一方、暑い日中を乗り切るための昼間の家庭での暑さ対策は、先ず朝起きると家中の全ての窓をしっかりと閉め、日の差す面は、少しでも照り返しの熱を防ぐため、カーテン、ブラインド、シャッターをしっかりと下ろし、日中は、絶対に窓を開けることなく家の中に溜め込んだ冷えた空気、穴熊生活をするようひっそりと暮らす<Photo B>のである。

特に、エアコンを設置していない学校、公共交通機関やほとんどの店内は、さながらサウナ状態になっても、文句も殆ど言わずジッと我慢の子で過ごし、日本と比較すると夏が短く湿気も少なく、7月を過ぎて8月半ばともなれば更に涼しさが増すドイツでは、装置あるエアコンが活躍する時期は精々一ヶ月くらいで、冷房は一般的ではないというわけである。



ドイツは、地図を見ると北海道より緯度が高く、ほぼ樺太と同じで、西ヨーロッパでは、どんなに猛暑の日でも北海、バルト海からの気候のせい、真夜中から明け方にかけては「高原の涼しさ」になるので、気温に加えて湿度がとにかく低いので日本の暑さほどの不快感はなく、地理的な違いが羨ましい限りで、これまでに夜中の寝苦しさは皆無で過ごせることにびっくり。

なお、3月の最終日曜日から10月の最終土曜までは、夏時間(日本との時差は7時間)が採用されるため、高緯度地方の特徴で日照時間も長く、朝は5時前から夜の10時近くまで外は明るいままである。

また、ドイツの列車は、ICE（新幹線）と EC（特急）を除いて、市バス、市電、地下鉄(Uバーン)や近距離鉄(Sバーン)にもエアコンの装置が備わっているのは全てではなく、暑い日にエアコン車両に乗り合わせるのは幸運である。

環境破壊に大きく影響するエアコンは、徹底して装備されることはないということで、ここでもエコ対策の一環に寄与の精神がかいま見える。

＝ヘルシーフードの日本食＝



10年ぐらい前から、新聞のレストラン案内で、日本料理店の紹介が増えて、日本食の関心が高まってきているようで、ここフランクフルトでも、日本酒を飲みながら、特に人気上位の「すし」をつまむ若いカップルも目立ち、最近は回転すし<photo C>もありで、他日市街を散策中に目にしたラーメン店で、店内を見渡しながら店員に聞いてみると、ほとんどが日本人客であるとの答えであった。

日本料理店では、肩のこらない雰囲気での店構えで、客を増やすべく人気とりも激しいとか、日本食人気の裏には、物珍しさだけでなく、脂肪分が少なく健康にいいらしいという印象があるようで、実際、若い世代を中心に、大好物の脂っこい肉料理を敬遠するドイツ人が増えてきているのと無関係ではなく、日本人の平均寿命が世界で上位の最大の原因は、食生活にあるらしいということも良く知られている。

一方、これまた数年で飛躍的に増えて、人気が高いアジアマーケットを覗いてみると、日本食品類を扱っているドイツ店には、米、麺類、佃煮、醤油、酢などのほか豆腐、納豆、こんにゃく、もやし、漬物、梅干し、らっきょうの類まで、近年ではほとんどが日本国内同様に調達できる。

＝外出時のトイレのこと＝

ドイツのトイレは、無料制（公共施設、空港、ホテル、レストラン、カフェ、ショッピングセンター、スーパーマーケットなど）と有料制（鉄道駅構内、大型デパートなど）があり、駅構内で見かけたのは、入口通り抜けバー横へのコイン投入<1ユーロ>でのバー開錠で入り、用足し後は専用口から出る仕組みで見張り人つき、デパートでは、入口に居座る番人脇のコイン受台<photo D>の小箱にコイン<1ユーロ>を置いて入り、用足し後は自由に出る仕組みで、お釣りのないよういざという時の用意が肝要で、日本とは違うトイレ事情のことを念頭にしての行動が欠かせない。

＝見かけたデモンストレーション＝

ドイツに何故に普及しないかと疑問に思っていたことであるが、過日とあるデパートの一角にて、日本製ウォシュレットのデモンストレーションを見かけたが、人だかりは少なく聞いてみると、ドイツでは生活上で必要とするほどのものではない、無駄なものとの考え方から、大半が見向きもしないとのこと。日本人的感覚では、便利なもので一般的需要供給物が、ここドイツ人に連鎖的に普及させるにはいつになるのか、飽くなきメーカーの今後は明日の風光は如何に！

滞在中の日常チケットの購入

当該チケットの購入は、65歳以上向けのフランクフルト市内網域①と同市外都市網域②がセットになった、1か月定期券で配備された交通機関（市バス、市電、地下鉄、近距離鉄）が自由に何回でも使えるものがあり、これ1枚〈約68ユーロ〉を購入した。（東京に例えると、①が23区内域、②が都下、川崎・横浜市、船橋・千葉市、秩父・さいたま市域ぐらいか）

利用条件は、月～金 一人で①が終日使用可（19時以降は二人で使用可）、土～日 二人で①②が、終日使用可となっているもので、日本と同じように高齢化が進むドイツでは、お年寄りが自由気ままに中心街や郊外を跨ぐ健康施設、買物やイベントなどに気軽に出かけて道中を楽しむことができる、気配りあるチケットサービスのシステムの一つでもあろうと思われる。

ある時々であるが、乗車中に検札官（3人グループ）による抜き打ち検札にあったが、定期券を提示しようとしたら即座にOK、無賃乗車を見つけれられた場合、普通料金の60倍にあたる罰金を科せられるとか。改札のないドイツの交通機関利用の際の切符の所持は、法律を守ることを極度に重視するドイツ人の国民性で当然の義務というわけで、捕まるのはたいてい外国人あるそうである。

滞在中のこのチケットの情報を得ての活用は、日々の行動範囲が広がり、楽々大助かりであった。今回はここまでとして、続編は次の機会を得て記したいと思う。了

2015-8 ドイツにて 中間一範



〈街中での夏の服装様々〉
ジャンパー姿の人が見えましょうか



〈日差し面の窓の様子〉
窓を開けることなくシャッターの全下しが大半



〈回転すし店〉
店内を覗いたら日本人客はいなかった



〈大型デパートのトイレ口〉
カメラを向けたら番人は隠れてしまった

